

天王村適産調旧蹟考

石川理紀之助著

天王村適産調旧蹟考目録

追分 狐の追分	1	かくれ沼 千人隠れ	5
長沼	1	蒲沼	5
天満宮	1	しめかけ森	5
鴨の池	2	御山さき	5
長沼の鳥場	2	死馬坂 嬉沢	6
草履沼	2	長者屋敷跡	6
上出戸 細谷の果木	3	男鹿古街道	7
細谷の古跡	3	天王	
三軒村	3	御休 くも舞	7
しょうふかい	3	名称	7
三十三観音の石塔	3	陣ヶイ森	7
下出戸の移住	3	岡田橋	7
古屋布の図	4		
次古屋布の図	4	塩口	
菖蒲谷地	5	羽立の石塔	7
古道 念仏車	5	菅生氏	7
次古屋布の寺跡	5	羽立の安田氏	8
念仏塚	5		

塩口の古井 8
渋谷の不動の石像 8

大崎

上谷地 8
上谷地のチクノ家こ 8
行人森 8

二田

腐植土 泥炭 9
まんだら井 9
二田の名称 9
早乙女の名称 9
桃木台 9

天王村適産調旧蹟考

追分 狐の追分

北青森、西男鹿、南土崎との追分也。四十年前まで（嘉永の頃）は中野の藤五郎茶屋といふ壺軒ありしを、今は式十余軒家つゞきとなり西側男鹿街道につゞきたるは天王村にして、其他中野、下刈の地にあり。狐の追分ともいふ。是は菅江真澄翁の記事によりて也。

真澄翁はじめて秋田にくだられたる時、此追分に人集りて何か木の塚を建て上に狐を刻みて建たりしが、同翁其後の通行には飛積して狐のみ残りてありしといふ。

長沼

長沼はもと御物川の川あとにして、中野琵琶沼より通じたる川筋の追分は砂の飛積したるもの也。此長沼は長沼下、細谷とつゞき、二田をへて大崎に出たる川筋也。

天満宮

上出戸にあり、古社也。同村木口氏の祖先神像

を負ひてこゝに鎮めし社也。社は中頃佐竹家の建立、后奈良喜兵エの再建也。

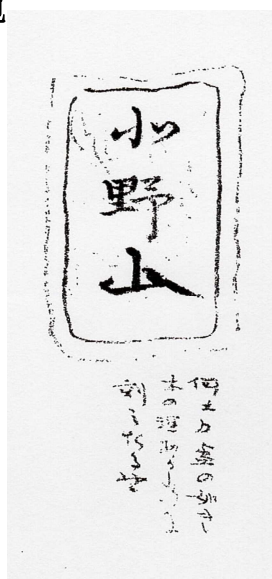
佐竹家再起代義処公狩に出させられ、社の側の池に鴨二羽遊べり。これを亨給打ざれば社を再建すべしとて鉄砲を放したるに誤またず打留たり。故に再建せり。

本社零落したる頃小泉の奈良喜兵エに子なく、いのりて一女を得たり（予が実家の玄曾祖母也）。これがはたしとして再建したるは今の社也。工人は名だゝる人にして秋田に無二の名工なりといふ。此大工は今の奈良茂の家も一時に建たりといふ。今も此祭事旧三八両月の廿五日には小泉に赤飯を炊きて出戸の家々に配る也。是れ社を立てゝ氏神の如く祭事を営めば也。細工中最も力士いとよく人の知る所也。其すべて本社工事人の目を驚かす処也。

社人もと木口氏の分地に弥勒院といふ修験あり。これは天満宮の鳥居の南の側にありしを百年余の事とかや、弥勒院の妻岩瀬より娶りたるを故ありて離縁となりたるに岩瀬に引移て其後岩瀬にありて此社の別当を勤めしと也。又神主には堀内の浜田讃岐守なりし也。浜田は奎之助の子孫也（此事

別にしるすべし。

小倉主水先生の額あり、本社正面の南の方に掲げたり。其文字左の如し。何土か盆の如き木の理あるものに刻みたる也。



鴨の池

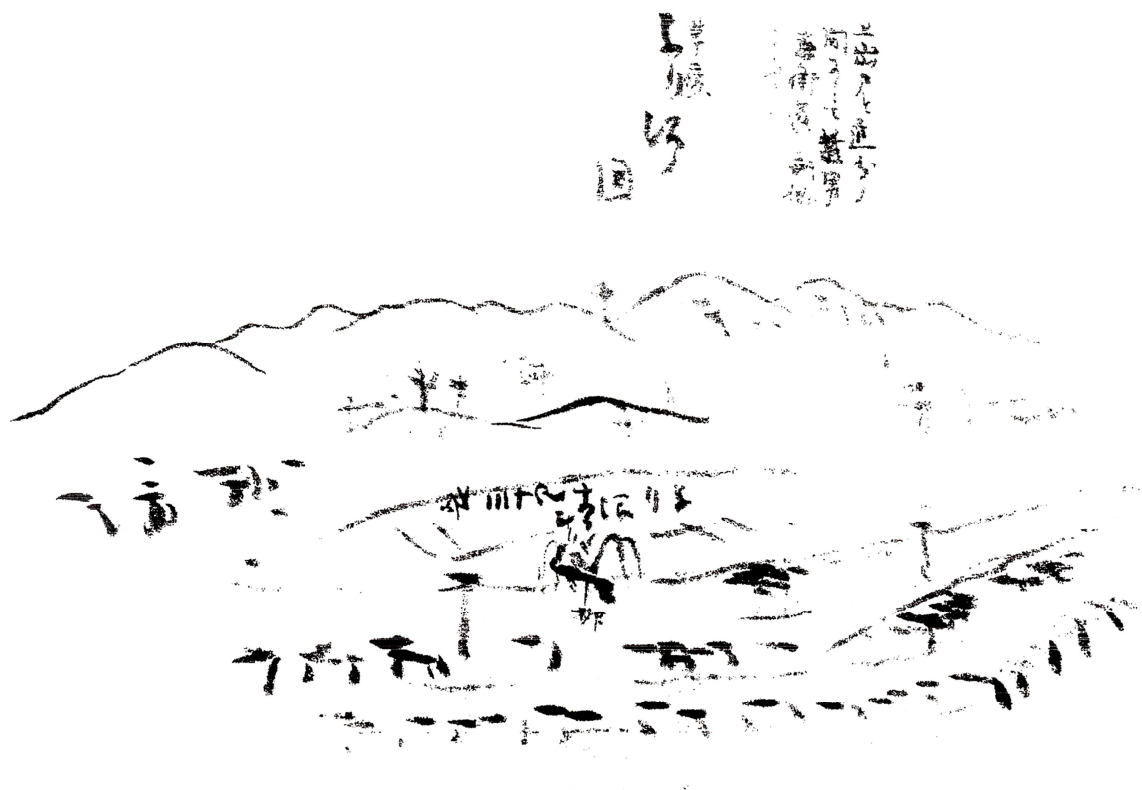
上出戸の男鹿本街道より本社に入るなはて道の北の方に田と池とあり。これはもと大なる池にて佐竹公の鴨を仕留たる池にていまに鴨ノ池といふ。

長沼の鳥場

長沼のもと佐竹家の御鳥打の地也。故に君ひて其時に築きたる鳥場のかたちいまだ存せり。水留め沢地に□如此ものを築きたるもの也。

草履沼

天王祭事の事を引合すべし。近年まで名高き深淵なりしといふ。今はあせて田となり図のべとし。



上出戸 細谷の果木

上出戸は火災後の為木なし。細谷も移村の為果木少し。

細谷の古跡

細谷は寛政十一年の新開地にして、今の細谷字に村居ありしを二田開田後上狼縁三枚橋の西に移りたり。則古屋布は今墓ある近処なり。

三軒村

二田開村後に開けたる村也。二田辺を中にして北野と大長根にあり松林の内なり。四戸の内三戸は二田、一戸は出戸の大メの分家なりと云。

しやうふかい

上北野、長沼の広野の古名也。勝負ヶ井等か、可考。

三十三観音の石塔

追分より天王村までの長里程に三十三番の観音の石塔を道側にたてたり。是は舟越の某が催主なるよし。

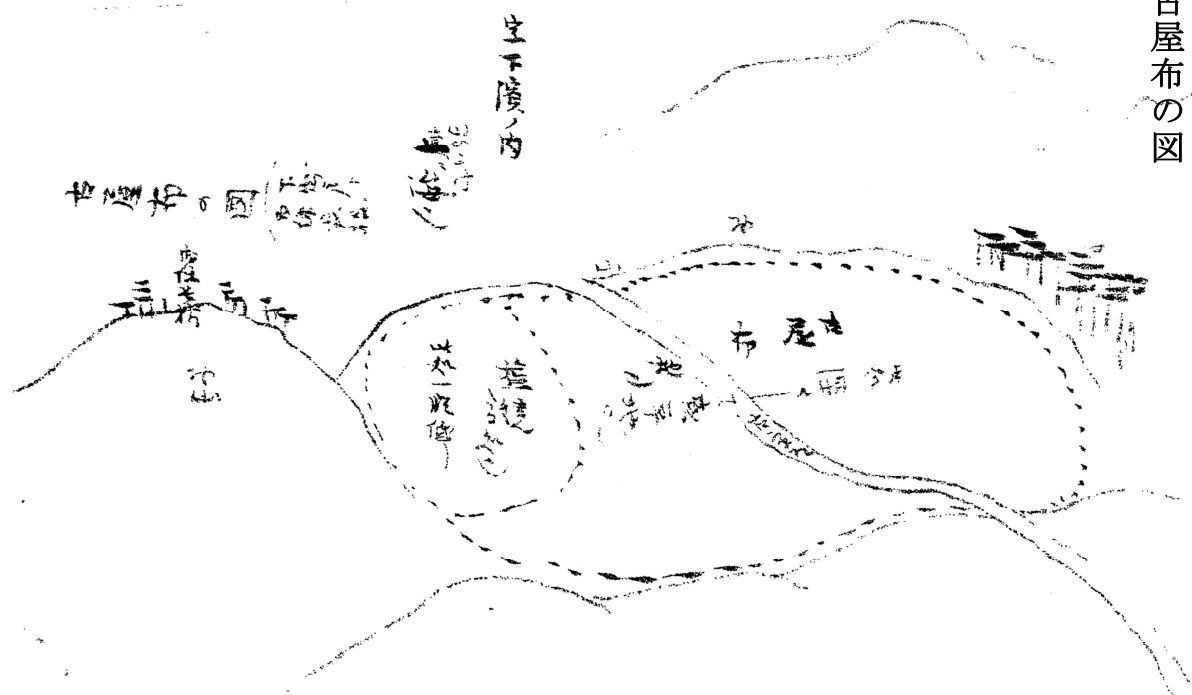
下出戸の移住

下出戸は古き村にして古屋布といふは下浜山海岸より二三丁東にして浜の打上ケの小山をへだてゝ一段深き処あり、古屋布といひて今に其跡さだか也。南の隅に塩焼たる跡あり、其よりつゞきたる山を御休み長根といふ。秋田城之助の古戦場たりし時の御休処といへり。砂の飛積に堪かね夫より又小山を越え二丁斗りにして移りたる古屋布あり。これは近年まで住たる処にて天保午年地頭吉田嘉エ門が働にて此村は余業にとて筵を織て脇本市に販くにも道路に出るに雪踏一村中出て通ふこと年々なるを以て、佐竹家男鹿収め粃を運搬する駄ちんととらせんとて今の地に移して口を今の村中の中央に建てゝ運搬せし故大に便を得たり。其以前より塩焼を本業として秋田には新屋と下出戸に塩壳鑑札を与へられたりといふ。嘉永の頃まで藩の御台処へ一軒より塩五升づゝ収めたりといふ。

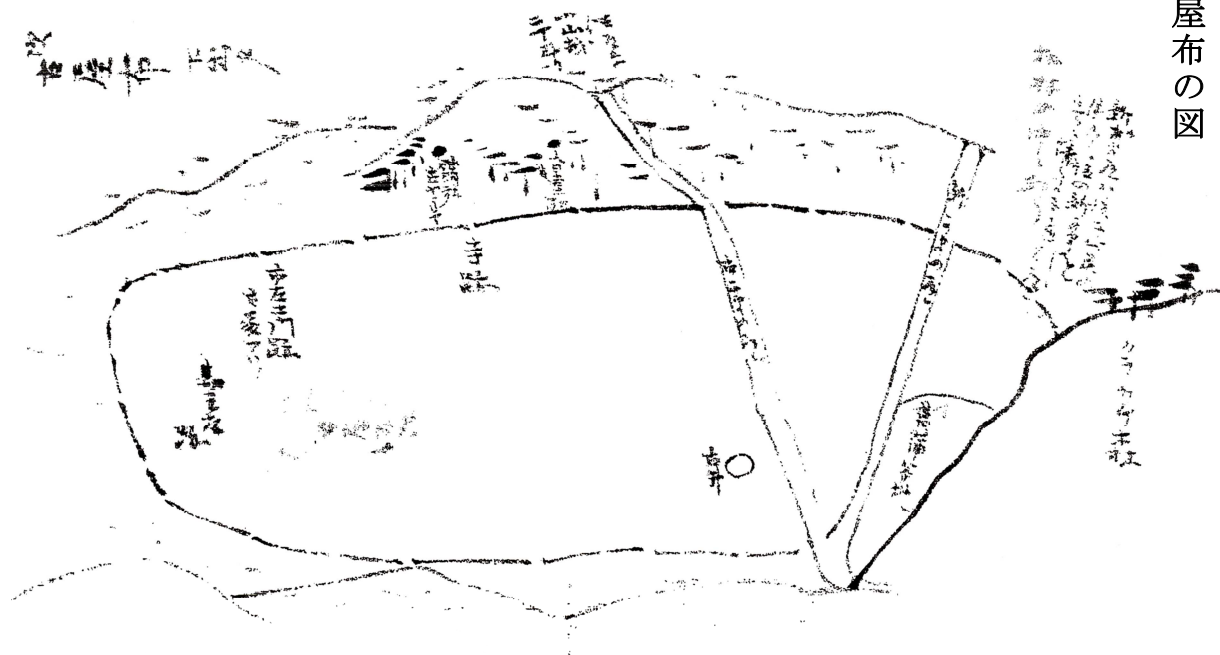
(塩浜出戸とは此処なるべし)可考。

此頃は松一切なく浜松などを焚たりといふ。今の下出戸に十七軒移り大凶年に三軒つぶれ、今また四十軒となれり。

古屋布の図



次古屋布の図



菖蒲谷地

下浜古屋敷の側にあり。此池より五月節句用の菖蒲を取りて佐竹家御台処に収めしと也。

古道 念仏車

次の古屋布より上出戸に通ふ道二筋あり。西を上八道といひて上出戸の天満社の側に出づ。又一筋は下夕道といひて鴨が池の中央に出づ。此出口の東側に念仏車といふ小森あり、これはむかしの寺のありし時の旧跡ならん。

次古屋布の寺跡

もと三ヶ寺ありしといふ。一は由利に移り、此村をも出戸といふ。此出戸より移りたるを以て名とすといへり。今一寺は潰れたらんか不明也。残り一寺は今の寺に引移りの時までありて、無住となり此伽羅を今の舟越の法華寺に譲りて今存せり。

念仏塚

下出戸の中央の東側にあり。これはむかし巡国せし人ありて蓑笠衣類ともこゝに埋めて念仏塚を建たりといふ。

かくれ沼 千人隠れ

念仏車より西の山を越て海の間にある風穴にして今は半ば開田となれり。又上出戸天満の社の西にあたり海に小山一重へだてゝ風穴あり。これは秋田古戦の伏兵ありし処といふ。又かくれ沼もこゝな類か。

蒲沼

もと六部の来りて開きたる地にして百年斗り前のことなりといふ。

しめかけ森

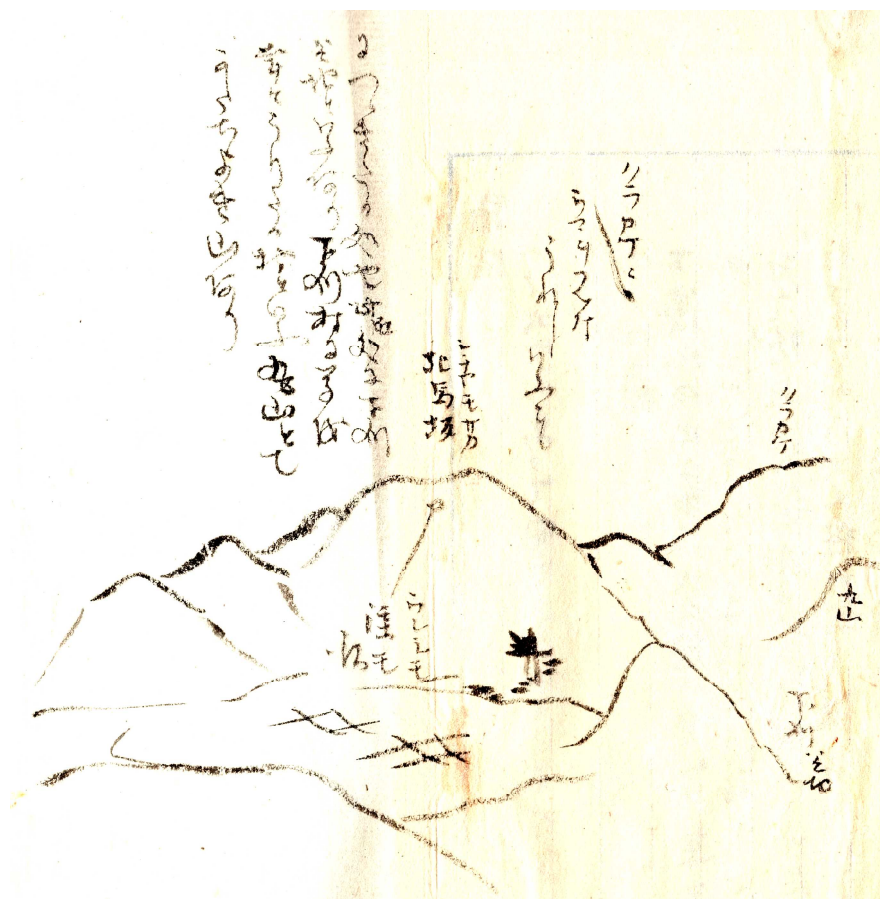
下浜山の内にあり、大久保の月山の祭日四月八日に柳にしめをかけてこゝに持来り神楽を奏せり。火を付て萌もえれば火災、水に入れて沈めば水災の兆といへり。四十年前に大久保の者と喧嘩ありて後止みたり、いかなる縁故にや。

御山さき

長者屋敷の近きにあり本山ともしり山と見通にして此山の中心にあるを以て名とせしといひつたふ。

死馬坂 嬉沢

鞍掛は大将軍の馬の鞍をぬぎてかけたる森なりといふ。此馬を臣下に見付て大将のありしをしりて嬉しいひしを沢の名とす。此に馬の死して埋めたるを死馬坂といふ。



長者屋布跡

長者屋敷は下出戸下浜山の字北端に在り（浜山の境）。東に横森あり、海辺を一重へだてたる野山中の凹地に一の大地あり、海賊の住たるあとゝもいひつたふ。



男鹿古街道

往古海岸を通して江川の丁子口をわたり往来せしを、后江川上谷地と蒲沼との間に古道といふあり。其后下出戸より次に今の道を開くといふ。

天王

御休 くも舞

天王の江川の出る村端の道の東側に在り、周圍に松たてり。牛頭天王の御輿を休め祭式を行ふ也。くも舞は牛頭天王鳥居前本通の町の出口間の川中にあり。

名称

天王 牛頭天王の称

ハラヒ 是も牛頭天王の祓なるべし。
コワツコ 夷語を可考。

塩口 干潟

藤吾の宮 渋谷不動台の南にして堤の下にて開田となり。
細谷 細谷地なるべし。

陳ケイ森

江川丁子口の南の野山の高手に社あり。江川産神よりみれば此社の口の方角也。もと秋田古戦に土崎勢の陣を取りたる処と云。

岡田橋

もと岡田はしのありし処は天王の裏表の両町の中央にあたる処より舟越をさしてわたしたりといふ。今も橋の古柱ありといふ。

塩口

羽立の石塔

松淵の村端の墓地にあり。石英粗面岩にして龍神を祭る。開村の時菅生喜右エ門が建たりといふ。文字あれども今日は雨天にて写得ず、雨覆の石の塔は文政年中の文字あり。

菅生氏

菅生喜右衛門の開村にして、今の上井川村井内の菅生家の別れにして、此開村の開き始は塩口村の脇より鋤立せしより今に其田を人よくしれり。故に中羽立を喜右衛門村といふ。

羽立の安田氏

菅生喜右衛門開村より二十年位後に寺沢より来りて開村せしよし、安田仁兵エの祖先也。今も井川の乗郷院の檀家也。菅生家も乗郷院の檀家なりしを寺暇いたせしが、追々開墾成就して移住人多きを以て寺暇を出さず今に同寺の檀家也。寺沢の安田家の分れ也。開村の時の槐とて仁兵衛の北の軒先に七八尺回り木あり。

塩口の古井（俗に八郎の足洗の井戸といふ）

塩口本村の丸谷久蔵の囲より西南に方り、僅か隔て、松壺木ありて今に飲料水とす。此事八坂神社の古跡にくはし。

渋谷の不動の石像

むかし海上を不動の石像を積み運びし時此近海にて舟止りければ、これを在せしに此地に鎮まりまさんことをつけあり、今の渋谷の不動社に祭る。後また佳文の方に刻みて送る、猶同じ。これをも本社に収めて神像とし、元との石像は別社にうつして祭れりといふ、右の石像これ也。

大崎

上谷地

含鉄砂岩あり此地は赤砂や鉄気なるべし。新関、白洲野の含鉄砂岩につゞきたる脈なるべし。

上谷地のチクノ家こ

上谷地の内大久保境に少し湾になりたる処あり、これをチクの家こといふ。もと此処の潟の中に寺ありしといふ。大浪の時には古銭のよることあり、此銭周助氏の向の家にも持たりといふ。行人森等に縁あらんか。

行人森

村の産土神社の後にあり、入定墓なるべし。今はほり崩して半ば攪たり。





二田 腐植土 泥炭

三枚橋下より下分水まで腐植土也。下層泥炭元と御物川の跡にして、全く腐植土を以て成れる地也。暖氣之年は泥炭に稲の根入りて栄へ、冷氣は根入りかねて稲不栄といふ。

まんだら井

中分水の西南にあたり、二田駐在所の東の沢端に井戸あり。これは蓮沼の蓮の糸を以て織りてまんだらを東福寺とかに納めたりと口碑ありといふ。近頃ませ垣を繕ひて保護をなせり。

二田の名称

飯塚の人二田是雄（元と門間祐蔵といふ）開墾したる開村也。昨年竿入となれるよし。其田の主に開けたるは三枚橋下より下分水までとす。畑地等数十丁に及ぶ。三軒村も二田の内也（内一軒出戸より移る）。

早乙女の名称

秋田に杜若は五月さきて早乙女の頃に盛なるを以て早乙女といふ。此草の多く生じたる沢地なればならん。

桃木台

新関の地境にあり、むかし桃を植初めし地にして新関の桃は此处より始るといふ。